様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　5 月　20 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2010
課題番号：２１７２０１１５
研究課題名（和文）プルーストと同時代の「復員文学」をめぐる文化史的研究

研究課題名（英文）　Proust and the “demobilization literature” of his era：a cultural history

研究代表者
坂本　浩也（SAKAMOTO HIROYA）
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：５０５３３４３６

研究成果の概要（和文）：
復員文学という観点からの文化史的な調査により、小説『失われた時を求めて』を第一次世界大戦中の文脈におきなおすことが可能になった。雑誌に掲載された兵士の書簡（『パリ評論』）、戦況記事（『フィガロ』紙の『ポリュビオスの解説』）、トルストイの『戦争と平和』などの比較分析をとおして、プルーストが、国民動員の道徳にかわる文学的復員（文化的な動員解除）の倫理を示唆していることを具体的に明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：
In this study, we explored the cultural history of demobilization literature, and argued that it is possible to read Proust’s novel in the historical context of the First World War. Through a series of comparative analyses of soldiers’ letters published in reviews such as *Revue de Paris*, military chronicles such as *Les Commentaires de Polybe* in *Le Figaro*, and *War and Peace* by Tolstoy, we showed that Proust suggested an ethics of literary demobilization which resists the moral of national mobilization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：フランス文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：仏文学、プルースト、第一次世界大戦、文化史

１．研究開始当初の背景

従来のプルースト研究においては、彼の小説『失われた時を求めて』の最終篇『見出された時』における戦争表象の独自性を確定するための文学史的かつ文化史的な視座が欠けていたように思われる。

病弱であったがゆえに兵役を免除されていたプルーストは、前線を体験しておらず、彼の作品における大戦のエピソードは、おもに銃後のパリ社会を描いたものである。したがって、例えば、アンリ・バルビュスの『砲火』に代表される「戦争文学」（つまり自然主義的な描写による前線体験の証言と、反戦主義的な告発とに力点をおく作品群）は、比較対象としてはあまり有効ではない。

他方、プルーストが熱心な読者であった同時代の活字メディアにもとづく文化史的な調査もまた、プルースト研究者によって活発

におこなわれてきたとは言えない。
研究代表者は、2005〜2007 年度に取り組んだ「プルーストと第一次世界大戦：戦時社会の表象に関する生成論的・歴史的研究」によって、文学作品と同時代の社会言説との関係を論じるための方法論的な基礎を確立した。
具体的には、新聞雑誌の記事や通俗小説など、同時代の資料を広範に調査することにより、具体的な紋切型やトポスをつきとめ、そうした紋切型やトポスがプルーストの小説にどのように取り込まれているのかを分析するという方法である（たとえば、ドイツ軍による空爆をワーグナー音楽になぞらえるという紋切型など）。
その文化史的な方法を基本的な出発点としつつ、「戦争文学」ではなく、新たに「復員文学」という観点からプルーストの独自性を探ることを試みることにしたのが、本研究である。

２．研究の目的
そもそも本研究のキーワードである「復員文学（littérature de démobilisation)」とは、批評家ラモン・フェルナンデスが、1920 年代の文学的流行を戦時中の不安への反動と見なす際に用いた表現をふまえたものである。その後、文学史家モーリス・リューノーは、大著『1919 年から 1939 年のフランス小説における戦争と革命』(1974 年刊）において、この表現を、終戦後の作品だけでなく、戦時中に書かれた作品を指すためにも用いた。そして、その典型的な作家として、ジロドゥー、コクトー、モーロワと並べ、銃後に留まったプルーストの名前を挙げている。
本研究では、近年発展著しい歴史学（文化史）の知見をふまえたうえで、この「復員文学」概念の再検討および再定義を提案する。その場合、問題となるのは、狭義の軍事的な復員（兵役から市民生活への復帰、除隊、戦後の生活）ではなく、むしろ「文化的な復員」、すなわち戦時社会に特有の心理的な国民総動員体制からの離脱である。
本研究の第一の課題は、そうした支配的な文化からの離脱が、どのような問題・トポスをめぐって、どのような詩学的・修辞学的技法をとおして実現されているかを具体的に明確にすることである。
ただし、「離脱」とはいっても、プルーストの小説においては、戦時社会の心理的動員が一義的に否定されるわけではないことに注意が必要である。
研究代表者がこれまでの論文においてしばしば指摘してきたことだが、友人宛の書簡に見られるプルーストの態度は、活字メディアの国粋主義を痛烈に批判する一方で、穏健多数派的な「愛国的賛同」（祖国防衛の正当性を信じ、戦争を甘受しつつ、死者を悼み、遺族に同情し、勝利を祈る態度）を保持しており、バルビュスやロマン・ロランのような、活動家の反戦思想とは異なる。
また、彼の小説の主人公も、同じ態度を示していると言ってよい。それでいて、小説『見出された時』のなかでは、心理的動員への批判的な視点が、直接的・間接的に示唆されている点が特異であり注目に値するのである。この点において、プルーストの小説は、戦時中に書かれた「復員文学」と呼べるであろう。
以上の認識をもとに、どのようなかたちで「文化的な復員」の可能性が示唆されているのかを、同時代の資料および文学作品と比較しながら明確にするのが、本研究の目的である。

３．研究の方法
本研究は、これまでに研究代表者が実践し、有効性が確認されてきた文化史的な方法を継続しつつ、新たな資料の発掘と活用を試みるものである。
すなわち、プルーストの小説における第一次世界大戦の表象の独自性を明らかにするために、文化史的な調査と相互テクスト論的な分析（文学作品における暗示的な言及、紋切型のアイロニカルな転用などの分析）を導入する。

(1)文化史的な調査の主な対象は、戦時中の雑誌新聞記事である。
『パリ評論』や『両世界評論』といったメジャーな雑誌に掲載された兵士の書簡や、当初『エコー・ド・パリ』や『フィガロ』といった日刊紙に発表された時評記事を収録した単行本（バレスの『大戦年代記』全 14 巻、ジョゼフ・レナックの『ポリュビオスの解説』全 19 巻）を参照する。また、それ以外の新聞（『ジュルナル・デ・デバ』や『タン』など）も随時調査の対象とする。

(2)文学作品を分析するにあたっては、おもに注目するポイントは、以下の４点にまとめられる。
①戦時中の社会言説・ステレオタイプ・国民文化（文学、芸術）への間接的な言及
②暴力的な状況を記述するときのアイロニーとユーモア
③隠喩の使用法
④語り手のエートス（自己演出）

以上が本研究の方法上のおもな特徴だが、さらに、『見出された時』という小説の最終巻が死後出版であることを考慮して、手書き原稿（いわゆる清書ノート）にまで遡って確認し、テクストの生成過程の細部にかんする検討をおこなう。

４．研究成果

本研究に取り組んでいる期間中、東京、ケルン、京都、パリにおいて、国際プルースト・シンポジウムが開催され、研究代表者は発表を依頼され、招待に応じた。したがって、第一次世界大戦期の「復員文学」にかんする調査と分析を出発点としつつ、それぞれの学会のテーマにあわせて研究成果を発表することになった。以下に、主な成果を要約する。

(1)2009年4月19日に東京で開催された国際シンポジウム「プルーストとその時代、小説生成の文化的コンテクスト」においては、「暴力と驚異：プルーストの見た戦争」と題して発表した。

まず、文学史家モーリス・リューノーの提示した「復員文学」の問題設定を継承しつつ、暴力的な状況の記述におけるアイロニーとユーモアの問題をとりあげ、プルーストが戦争の現実にたいしてどのように距離をおいた提示法を選択したのかを具体的に示した。

つぎに、戦争という暴力に対峙した芸術家（または芸術家的な感性の持ち主）たちの反応を示すものとして、前線からの兵士の書簡というジャンルに着目した。戦時中の雑誌の広範な調査により、兵士の書簡が、新たな文学的感性の誕生を示唆するものとして注目されていたことが明確になった。

また、この調査により、プルーストの作中人物サン＝ルーの手紙のモデルと見なしうるような手紙が、『パリ評論』に匿名の画家の書簡として発表されているという事実を発見することができた。この無名書簡と小説テクストを比較分析することにより、サン＝ルーという作中人物の造形上の特徴がより鮮明に浮かび上がった。すなわち、国粋主義的な動員体制からの心理的な自由を体現する一方で、自己懐疑の欠如と知性の限界を示す例ともなっている点である。

サン＝ルーの前線からの書簡については、これまでほとんど同時代の比較対象（ないし発想源）が提示されてこなかったため、この『パリ評論』掲載の画家の書簡により、プルーストの文化史的な背景を理解するための有効な参考例をもたらすことができたと考えている。

(2)「動くもの、動かされるもの」をテーマにしたケルン・プルースト協会主催の国際シンポジウム(2010年10月16日)においては、まず、戦術的な「機動性」と戦況の「流動性」の問題が、作家の歴史観・文学観・心理学的考察（動機の分析）を比喩的に表現していることを確認した。

注目した具体例としては、ドイツ軍のヒンデンブルク将軍の戦術がナポレオンのそれに比較・同一視されている点があげられる。この点については、まず、プルーストが第一次世界大戦中に「ジュルナル・デ・デバ」紙に掲載されたアンリ・ビドゥーによる軍事評論を参考にしている点を確認した。そのうえで、軍事的な現実が、最終的には彼の文学における中心テーゼ（行動の動機そのものの流動性）へと回収されていくプロセスを明らかにした。

次に、愛国的「動員」をめぐる礼賛的な描写と批判的な分析の混在に注目し、国民動員の道徳（犠牲精神の礼賛）にかわる文学的復員（文化的な動員解除）の倫理が示唆されていることを明確にした。

プルーストは、サン＝タンドレ＝デ＝シャンという架空の教会建築に託して、古きよきフランス人（農民から貴族まで）の伝統的な愛国心と一体性を礼賛することにより、国民総動員を神話化しているが、同時に、戦時社会を振り返ることになるはずの未来の歴史家の視点を仮想し導入している。そうした時代を越える想像力およびレトリックによって、善良な心の持ち主が大量虐殺の当事者になるという大戦の現実を、戦争のただ中で相対化しているのである。

この研究発表により、文化的な動員と復員という問題設定が、プルーストの小説における戦争の位置づけを考えるうえで必要不可欠な視座を提供するものであるという点があらためて確認された。

(3)京都の学会（2010年11月21日）においては、プルーストと19世紀文学との関係（継承か断絶か）が中心テーマに設定されていた。そこで研究代表者は、『戦争と平和』の著者トルストイをとりあげ、彼の描くナポレオンのロシア遠征と、プルーストの描く第一次世界大戦とが意外なかたちで重なり合っているのではないかという仮説を検討した。

まず、青年期からのプルーストの読書体験を振り返ることにより、トルストイが、愛国心と反戦思想、軍事的天才と戦術の科学性、さらにはフランスとロシアの小説観にかかわるさまざまな論争において、プルーストにとっての潜在的な模範、論敵、分身または同志だったことを確認することができた。

トルストイへの注目は、理論的な意味でも有意義な貢献をもたらした。参照したのは、トルストイを例に「異化」の手法を論じたロシアの理論家シクロフスキーとイタリアの歴史家カルロ・ギンズブルクの研究である。この先行研究の応用により、『戦争と平和』、特にアウステルリッツの戦場でアンドレイ公爵が重傷を負い、広大な空を見上げて、地上の権力争いの虚しさを悟る場面が、プルーストの小説における戦時下のパリの空の描写がもつ復員文学的な要素の重要なモデルとなっているという認識が可能になった。

(4)2011 年 3 月にはパリに出張し、まず「プルースト研究の最近の動向と新たな方法」にかんするワークショップ（10 日）で、文化史的な視点の意義を提示した。

文化史的な方法論を選択した経緯を説明しつつ、これまでの研究の成果を要約的に提示することで、ワークショップ参加者から、文化史的な方法論の新しさと有効性に対する好意的な評価を得た。とりわけ、『パリ評論』誌や『フィガロ』紙などのような同時代の新聞雑誌の調査にもとづくプルースト研究を、今後も、場合によっては共同研究や国際シンポジウムのようなかたちで、継続・発展する必要性が確認された。

続けて参加したサンジェール・ポリニャック財団主催のシンポジウムは、プルーストの多彩な友人関係に着目したものであった（12 日）。ここでは、モーリス・リューノーによって「復員文学」に分類されていたコクトーをとりあげ、ふたりの作家の複雑な友情の変遷を論じた。

以上、２年間の文化史的調査を通じ、狭義の復員文学（ジロドゥー、コクトー）だけでなく、新聞雑誌における戦況記事（ジョゼフ・レナックの『ポリュビオスの解説』）、トルストイの戦争文学など、戦時文学としての『失われた時を求めて』の新たな比較対象をとりあげることによって、プルースト研究に文献学的な貢献をおこなうことができたと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計６件）

①. Hiroya Sakamoto,《 Cocteau 》, 国際シンポジウム《 Proust et ses amis II 》, サンジェール･ポリニャック財団(パリ), 2011 年 3 月 12 日
②. Hiroya Sakamoto, 《 Lire Proust du point de vue de l’histoire culturelle ： autour des inventions techniques et de la Grande Guerre 》, ワークショップ《 Proust ： travaux récents, nouvelles méthodes 》, コレージュ・ド・フランス・ユゴー財団（パリ）, 2011 年 3 月 10 日
③. Hiroya Sakamoto, 《 Des campagnes napoléoniennes à la Grande Guerre ： Proust lecteur de Tolstoï 》,国際シンポジウム《 Proust et le XIXᵉ siècle ： filiation et ruptures 》, 関西日仏学館, 2010 年 11 月 21 日
④. Hiroya Sakamoto, 《 Mobilité et mobilisation ： le conflit mondial vu par Proust 》, 国際シンポジウム《 Marcel Proust ： Bewegendes und Bewegtes. Nouvelles approches proustiennes sous l’égide de la Société Marcel Proust de Cologne 》, ケルン・フランス学館（ケルン）, 2010 年 10 月 16 日
⑤. Hiroya Sakamoto, 《 L’invention technique comme métaphore ： le côté Jules Verne de Proust ？》, 日本プルースト研究会, 2009 年 5 月 23 日, 中央大学
⑥. Hiroya Sakamoto, 《 Violence et merveille ： la Grande Guerre selon Proust 》, 国際シンポジウム《 Proust en son temps ： contextes culturels d’une genèse romanesque 》, 2009 年 4 月 19 日, 東京日仏会館

〔図書〕（計１件）

①. 共著(N. Mauriac Dyer 編著)Proust aux brouillons, Brepols, 2011. (2010 年 11 月開催のシンポジウムにおける発表をまとめた論文集；以下１章分を担当)《 Artistes face à la violence ： la Grande Guerre selon Proust 》, p. 145-156.

６．研究組織
(1)研究代表者
坂本　浩也（SAKAMOTO HIROYA）
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：５０５３３４３６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし